

## 第3回

1980年1月23日の講義(p.53-p.82)

ミシェル・フーコー, 『生者たちの統治 コレージュ・ド・フランス講義 1979-1980年  
度』

【前回の復習と今年度の講義の目的】(p.53-p.57 l.4)

- 前回は、オソポクレスの戯曲がどのように首尾一貫して、2つのタイプのアレテュルジー(真理陳述の様態)が嵌り合ってオイディプスを閉じ込めてしまうのかを示した

	第一のアレテュルジー 神託的・宗教的アレテュルジー	第二のアレテュルジー 法的アレテュルジー
真理陳述の内容	何も逃れることのできない真理陳述	記憶という形式や掟に強制的に従う〈真なることの語り〉で、自分から出発するようなもの
権威の主体	ある名の力によって権威づけられている	「エゴ[我が]」ということができる <u>事実のみによって権威づけられる</u> ←ここが重要
例	「俺はロクシアス[=アポロン]に仕える者だから、こんなことを言うのだ」	「私が」「私自身が」「私自身がそこにいた」「私自身の手で渡した」「私自身の手で受け取った」

- 真理陳述やその礼儀や手続きにおいて、「私が」という一人称の要素を今年は研究してみたい

➤ 古代ギリシアの文献における真理陳述の形式

- 〈真なることの語り〉は、真理の発話・表明・現出化として現れるために、話者にとって外的な権威を引き合いに出す

例1) ホメロスの場合なら、王や長が立ち上がって自分の意見を正しく真である意見として提示するとき、ホメロスは自分の力の徴でもある指揮棒を手にする

例2) 詩人が語るときは必ず、「記憶」神である神的存在の加護を祈り、女神としての「記憶」が真理を徴づける

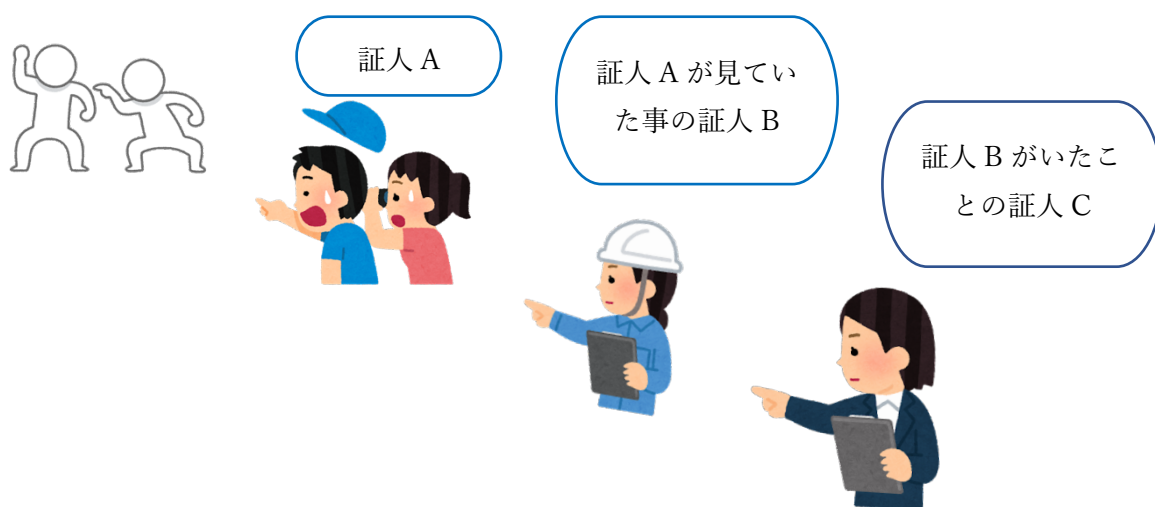
例3) 夢の場合、私が夢の支配者ではなく、別の何かが語り、徴を与える時にこそ、「夢が真を語る」と言える

↓つまり

- 〈真なることの語り〉を現さしめ、〈語る者は真理を保持するものではない〉ことで確認しようとする勾配があり、真理は他のところから来ている
- ここで問題となるのは、〈真なることの語り〉と〈真なることを見たこと〉の同一化に至るまでのプロセス

➤ 「私」が真理を語るプロセス

- 法制度の歴史においては、その場において「これこそが真理だ」と言える者として証人が登場することが一人称の始動
- いくつかの事柄が真と確認されるのは、誰かが見たことの証人がいたことの証人がいたから



＝この証人から証人への連鎖が真理を構成するためには、「私自身」ということができる誰かを参照している条件が必要

↑このようなアウトス(私自身)とアレテュルジー(真なることの語り)の関係の歴史全体に関心を持っている

- オイディプスは、占術師と証人のアレテュルジーの間で、何が起きたかについて無知
- 戯曲を2つの水準で読解すると、オイディプスははっきりと知の徴を担っている
  - 知の徴は、宣言されるのを聞く聴衆の心の中では〈私たちは皆、オイディプスが知らないことを知っている〉という事実を送り出されており、彼が「私は知っている」という瞬間に、私たちはみな彼が知らないことを知っているから
  - ＝オイディプスの知をはっきり示している表現は全て彼の無知に関係づけられる
- さらに、オイディプスの知の徴は完全に首尾一貫した全体を構成しており、ある特定の形式を兼ね備えた特殊な知、占術師の知や証人の知との関係で完璧に記述できる

【オイディプスの知】(p.57 l. 5-p. 67 l. 10)

- まず、オイディプスに特有な知を特徴づけるのに重要なテイレスiasとの言い争いの場面を参照する
  - テイレスias:「お前こそが結局罪ある者なのだ。お前は私から真理を奪い取ろうとし

ている。…中略…ライオスの殺害者はお前なのだ。お前はライオスを殺したし、さらに多くのこともした。それを言ってやることもできる」

オイディプス：「おお、富よ、おお、権力、テュランニ(権力)よ、テクネー・テクネース(究極の技、すべての技にまさる技)よ…後略…」(p. 57 l. 11-12)

↓

- [富・権力・技という] 3つの語の中心にあるテュランニス(=「権力」)は、富とテクネー・テクネース(究極の技)の両側から挟まれている

→だから、オイディプスが告発されている話で問題になっているのは、富と権力とテクネー・テクネースである

➤ テクネー・テクネースに注目する理由(p. 57 後ろから 1-p. 58 後ろから 3)

- 第一に、紀元前 6-5 世紀以前の文献では、権力が術として規定されたことはないから  
- 第二に、政治権力の行使が、どの程度まで修行や完璧さや捷や手段や作法などを可能にするような知、技術知、技量などを要求し、想定しているかという問いは政治的議論や哲学的議論において根本的に重要になっていたから

- 第三に、政治的術一般、とりわけ人間一般を統治する術の表現であり続けたから  
→テクネー・テクネースは、18 世紀に至るまで、常に良心の指導を規定し続けた、つまり魂を指導する術であった

=人間たちを統治する術とアレテュルジーの関係について論じようとしているため

➤ クレオン、テイレシアス、オイディプスのテクネー(=技術)(p. 58 後ろから 2)

クレオンのテクネー：節度を保つ(p. 58 後ろから 2-p. 60 l. 11)

- クレオンがオイディプスに対して突き返す自己弁護は、本当らしさという水準での弁護になっている

→(本当らしくないという理由は、)クレオンには第一級の地位があり、他方でデュナスティア(=何人かの人が共有し分かち合う、一種の支配力)がある

↓どう分かち合うのか？

- 権力者(=王)と被統治者(=民衆)の間で特権的であると同時に媒介的な位置にいる

=一方では、義兄弟と貴族に結びつけられ、他方では一般民衆に結びつけられている

- それによって、王であることなしに王として生き、自ら統治することなく生きる

- このように生きるには、法や規則や慣習を尊重し、彼を王と民衆に結びつけてくれる結合を尊重すること

⇓これと相対するのがテイレシアス

テイレシアスのテクネー：自分の思索に沈潜(p. 60 l. 12-)

- テイレシアスは神託を解釈するテクネーを持っており、『オイディプス王』では否定的な皮肉を込めた意味で使われている

=予言のテクネーに対する根本的な疑義

- このテイレシアスの実践を特徴づけ、オイディプスもイオカステもテクネーと呼ぶこ

とを認めないものは、2つの事柄に由来する

- 第一に、テイレスシアスが真理と生得的な関係を持っているため、それはテクネー(技法)ではないということ
- 第二に、テイレスシアスは〈思慮すること、熟考すること、自己に沈潜すること、思考の深みに入り込むこと〉によって自分の中に真理を発見する

#### オイディプスのテクネー：真理の発見

- 特徴づけるために戯曲ではヘウリスケイン(=「見出すこと、発見すること」という語がよく使われる

例) 42 行目：「ポリスの人々はすべて、あなたがなんらかの救いを見出すことをお願い申します。」

68 行目：「不安がる民衆のために私が自分が見出した解決を教えよう。」

120、128、304 行目：テーバイの人々に対し、ライオス殺害時に「殺害者を発見する」ことをしなかったことを責め、オイディプスが発見しようと試みる

- オイディプスのヘウリスケインには2つ側面がある

(1) 知らなかった者→知っている者への変容 (p. 63 l. 7-p. 66 l. 2)

↑この変容の技法が、政治照学的な議論、教育学的な議論、修辞学的な議論、言語について議論、つまり紀元前5世紀アテネの言語使用についての議論の核心にある

- この変容は、テクメーリオン(=徴、記号、手がかり、目印)をオイディプスがかき集めたから可能になった
- このテクメーリオンは4つの異なる方向で機能する

① 現在から過去への方向

壊滅的な現状の原因は過去にあるため、現在から過去に遡行しなければならない

② 過去から現在への方向

イオカテスが言った「…前略…分別をもって、過去から現在のことをお考えなさい。」というセリフに表れている

③ 現前から不在への方向

オイディプスが手にし、彼が見て知っていることであり、なぜそれが言われたかを知っているものを見つけなければならない

④ 不在から現前への方向

不在である者から出発して、殺害に実際に立ち合い、自分の目でそれを見た者へと移行すること

↓

最終的にたどり着かねばならないのは、現前そのもの、視線そのもの、自分自身でそこにいた者の視線そのもの

→こうした要素がオイディプスを、知らない者→知っている者に変容させる

(2) 自分自身で発見する(p. 66 l. 3-)

- 他のものを信用しておらず、問題を自分自身で解決したいから、オイディプスは自分自身で発見したがる  
=オイディプス自身が真理の遂行者になる
- ひとつのテクメーリオン(=徴、記号、手がかり、目印)から、別のテクメーリオンに進み、現場に物理的にいた者の場面に辿り着くまで、終始その遂行者であった

➤ オイディプスがヘウリスケインによって明らかにした2つのもの

- (1) 出来事そのもので、人間たちの幸福と不幸、様々な境遇を明るみに出す
- (2) これらの出来事を暴くことによって、神意から逃れたり、その効果を制御したりすること

↑暗礁を探ったり、隠れていれば見つけ出し、座礁を防ぐ方法であり、発見術というよりは操舵術といったほうが良い

↓では、

Q.オイディプスが自分のものと見做したり、自分のための術と考えたりしている発見は、統治の実践(=暗礁をすり抜けるように船を操舵する術)とどのような関係を持っているのか

→権力について話をする

【指摘したかった2つの問題】(p. 67 l. 11-p. 74 後ろから 4)

➤ 権力の問題

- 戯曲全体を通してオイディプスは権力の問題ばかりを耳にする
- オイディプスは、話の中で都市に蔓延っている疫病という不幸の犯人を見つけようとする  
↑その理由は、もし自分と暗殺者の間に何らかの関係があったりしたら、自分は権力を捨てることを受け入れるから
- 予言者邸レシアスと口論した際やクレオンやイオカステの場面、そして戯曲全体を通してオイディプスにとっては最後まで権力だけが問題となっている

➤ 掟の賞賛の問題

- オイディプスがライアスの殺害者であることが本当らしいことを発見してしまう前半と、真理を成就してしまう証言と奴隷の後半部分の間に、コロスの歌がある
- コロスが介入するのは、オイディプスの無罪か有罪かを証明する使者の到着を待っている時
- 前半ではコロスはオイディプスに対して愛着や情愛や忠誠を示しているが、後半になるとオイディプスの権力を否定的に描き出している  
→ここでは僭主的権力のこと  
僭主：明確に規定された政治的人物という意味
- オイディプスはこの僭主的特徴の担い手として登場する
- 第一に、オイディプスは生まれながら権力を持っていたわけではなかったため、生涯

で頂点とどん底が交代し続ける不安定な運命を経験する

- 第二に、オイディプスはポリスを救うことで、僭主を正当化し、権力を行使する権利を完全に備えた
- 第三に、僭主が都市を救う行為は、選手とポリスの間に感謝や恩義や情愛や愛の関係を打ち立て、構成し、基礎付ける  
→ここから、オイディプスはたった1人でポリスを救い、ポリス全体が彼個人につながっている事で、孤独な長である
- さらに、オイディプスが都市を自分のものとみなすという僭主的権力の特徴が生じる  
→彼が与える命令や下す決断は、彼の意味だけに根拠を持ち、掟やノモスに関するものではない  
=彼の権力は操舵つまり統治の必要性に照らして秩序づけられていて、それは一つのテューケー(=人間が縛り付けられることにある一連の出来事)に他ならない
- この僭主的権力はオイディプスのヘウリスケイン(=「見出すこと、発見すること」)と正確に一致している  
→オイディプスが発見しながら操舵=統治することを余儀なくされているのは、発見することによって障害物を見定め、神意を通してテューケーを見定めることができる為  
↑このことにこそ僭主的な権力の行使がある

↓このように権力を行使した結果…

- オイディプスが別の罪人を発見しようとした地点において、自ら有罪の判決を下すことになる
- テーバイが救われるためにはこのような形式のアレテュルジーが発見される必要があり、その代わりに罰せられるのはこの真理の支配者と自称する者であった  
→自分の利のため、障害物と偶然のゲームを現出させ、なんとか切り抜けようとするために機能させようとした

【まとめ】(p. 74 後ろから 3-p. 72 後ろから 4)

- 悲劇『オイディプス王』そのものがアレテュルジー(真なるもの)である
- この戯曲で現れる、オイディプスが真理に到達した方法は、神々の予言に対して現実的で効果的な内容を付与するための一つの方法
- この審理の手続きをオイディプスが自分で操舵=統治して、都市という船を、運命という暗礁をくぐり抜けて導くために、唯一の支配者に結びつけることこそが、有罪の判決を下す  
↑ここでは、僭主的な使用法、テューケー(=人間が縛り付けられることにある一連の出来事)との関係で定められ、神意には対立する使用法が有罪とされる
- 戯曲の最後には、オイディプスが開始した発見の手続きによって、証人、奴隷などが「私がそこにいた」と言えるようになる  
→このように彼らが言うことで、テイレスシアスの予言や神意に真理という内容が付与

される

=第二のアレテュルジーが第一のものに結合することによって、オイディプスはテーバイが救われるために排除される

↓しかし

Q.オイディプスはこのテクネー・テクネースを肯定的に使ったことがあるのでは？

→オイディプスは、テクネー・テクネースではなく、彼のグノーメー(=判断や法的な行為)によってこそ都市をある時に救ったものに他ならない。

そして、幸運と不幸のゲームに結びついている僭主権力の行使の枠内で、真理の発見の方法を活用した時には、彼は不幸の方へ引きずられていた

**【次回の講義】** (p. 76 後ろから 3-1)

- アウトスとアレテュルジーの関係の問題に移行する
- 真理の手続きの内部において私自身のゲームはどのようなものなのかを考察する